



TITLE:

現代の經濟學と古典

AUTHOR(S):

青山, 秀夫

CITATION:

青山, 秀夫. 現代の經濟學と古典. 經濟論叢 1955, 75(4): 202-208

ISSUE DATE:

1955-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/132417>

RIGHT:

經濟論叢

第七十五卷 第四號

經濟學をいかに學ぶか

現代の經濟學と古典……………青山秀夫……（2）

經濟學の歴史的研究の意義……………出口勇藏……（9）

經濟法則の認識について……………吉村達次……（25）

會計學的觀點と會計學的思考……………酒井文雄……（35）

一八三〇年イギリス下院の階級構成……………佐藤明……（55）

ドイツ帝國主義と「結集政策」……………大野英二……（74）

ドイツ共和民主國における經濟發展……………金鍾碩……（93）

公有林野統一に現れた絶對主義的經濟政策の特質
……………鶴嶋雪嶺……（114）

ロック・ウッド著 日本經濟の發展（1868—1938）
……………堀江保藏……（130）

〔昭和三十年四月〕

京都大學經濟學會

現代の經濟學と古典

青山秀夫

一

經濟學にも、いろいろの古典がある。アダム・スミスの『國富論』（一七七六年、大内兵衛譯が五冊にわかれて岩波文庫におさめられている）、ロバート・マルサスの『人口論』（第一版一七八九年、高野・大内共譯を岩波文庫におさむ）、デヴィッド・リカードの『經濟學および課税の原理』（一八一七年、小泉信三譯を岩波文庫におさむ）、ジョン・ステュアート・ミルの『經濟學原理』（一八四八年、月田正雄譯、春秋社刊）、アルフレッド・マアシャルの『經濟學原理』（一八九〇年、大塚金之助譯、改造社刊）などはその重なるものである。もちろん、カール・マルクスの『資本論』（一八六七年、長谷部文雄譯、向坂逸郎譯などがある）も重要な古典であらうが、わたくしはそれに言及する資格があるとおもわれぬから、ここで古典といえば、大體、上にあげたようなものとお考えいただきたい。

とにかく、經濟學で古典と稱せられるものは、分量にして、相當多い。そこで、「一體こういう古典をどのような方法で読んで行つたらいいか。譯で読めばいいか、それとも、傍らに辭書を備えて、丹念に原書を追跡して行かねばならぬか。それとも、適當な學說史の書物で、一通りの知識さえもてばよろしいか。それとも全然讀まなくてもいい

か。」經濟學を學びはじめた方は、そのさまざまな疑問の一つとして、こういう疑問をもたれるかもしれない。誰れか、若い學生の方から、上記のような質問を呈出されたとして、それに對する答えをここにしるして見たい。

二

論語に「朝に道を聞けば、夕に死すとも可なり」という有名な句がある。道と呼ぶか、神とよぶか、呼び名は別として、人生に學ぶべき神聖な或るものがあることは否めない。また、經濟學という學問の中に、そういう神聖なものを求めることが、まづたく無意味であるともいえない。しかし、そういう要素を眞正面から強調しすぎることは、經濟學の場合、危険である。經濟學が取扱うのは、いつて見れば、人間の仕事とくらしである。われわれの仕事をみのりゆたかにし、それによつて日常のぐらしを樂にしたい、こういう要求が經濟學の根本の推進力である。

日常の仕事とくらしという地味な場面に、關心をもつことを經濟學は先ず要求する。こゝで道を求めるものは、一度世俗に自己を埋没する覺悟を要求される。

諸君に要求されているのも、こういう地味な生活の場面への關心である。諸君は、早かれおそかれ、學校を出て、職業をもつ。自分の仕事で自分のぐらしをささえねばならぬ。しかも、職業はいずれ經濟に關するものであらうから、社會に貢獻するためには、如何なる形においてせよ、その日常の仕事を通して、人々の仕事とくらしを、少しでも、樂にしてゆくことに役立つよう、要求されている。諸君は、生活の地味な場面に關心をもたねばならぬという運命を、すでにみづから選んでいるわけである。この場面では、地味な努力を一步一步つみ重ねてゆくことが要求されているが、諸君はこういう努力に、むしろ、意義を見出さねばならぬ。

これが、經濟學の初めに要求される關心である。私はこういう關心を前提しながら、話をすすめたい。こういう關心を前提するとき、問題はほんとうにハッキリした姿をとつてくる。

三

かような關心と態度から出發するとき、まず、氣付くのは、われわれの手近かなところに、大切な問題がたくさんある、ということである。われわれの仕事とくらしはどうなつてゐるか。かようにして、日本の經濟をかえり見れば、たとえば、ただちに、日本の經濟自立の問題にぶつかる。

もちろん、日本經濟は世界經濟の中にあみこまれ、その中で、外國の經濟といういろいろの交渉をたまちながら、生きている。日本の經濟について考えようとすれば、いきおい、國際經濟について知らねばならぬ。

ところで今の經濟は、もちろん、完全な自由放任經濟ではない。大抵の場合、國民經濟は、政府の計畫・統制によつて、何らかの枠の中で動いている。ゆるされるかぎり、競争を保存し、それによつて能率を確保することは、必要であるし、また、忘れ勝ちなだけに、強調されねばならぬ。しかし、計畫的要素が他面非常に強化されてきたことも、否めない事實である。

さて、現代の經濟學は、經濟自身のこういう状態と無關係ではない。恐らくジョン・メーナード・ケインズの『雇傭・利子及び雇傭の一般理論』（一九三六年、雇野谷九十九譯、東洋經濟新報社刊）を引合いに出すのが、（この書物の過重評價に讀者をみちびく危険はあるにしても）、やはり便利である。この頃と前後して、經濟理論は、現實の經濟政策の立案との協力を急速度に強化した。理論は統計と結びつくようになり、計畫・統制の枠の効果を理論

的に明かにしはじめたし、逆に、この目的にそうように統計資料も整備されるようになっていった。一國內の計畫・統制についてと同じことが、或る程度、國際協力、後進國開發などについてもいえる。

しかも、こういう經濟分析の努力は、研究室・調査機關内部だけの仕事にとどめられず、ソ連その他の共產主義國をのぞいては、白書・大統領報告その他の形でたえず公にされ、一般市民も容易に近ずきうる姿をとるようになった。自分の判斷をもつためには、自分たちの仕事とくらしの状態についてのインフォメーションが必要であるが、それが、ととのつた形で、くわしく提供されるようになったわけである。

もちろん、こういう新しい經濟學は、それ以前の經濟學と連續したものをもっている。古典派經濟學に見られるあの精神と洞察とは、そこに保存されている、といつていい。しかし、ケインズ革命といわないにしても、形の上では可成りの變化が生じた。經濟學の以上の努力は、同時に、經濟學を前よりも一層わかりよいもの、多面的なもの、活き活きしたものとした。これと同時に、經濟學の専門分野に、この發展に照應した基準的な書物が、それぞれ整備されるようになった。經濟學徒らしく、自分たちの仕事とくらしの現状を把握し、しかも、高い理論的分析で裏付けられた洞察をもつ力を養ってくれる教科書がいくつもできた、というわけである。いわゆる原論の領域では、J・R・ヒックス『經濟の社會的構造』（一九四二年、酒井正二郎譯、同文館刊、もつともこれは副題のとおり入門書である）、P・サミュエルソン『經濟學——經濟學的分析への案内』（一九四八年）などがその一例であるが、それぞれの専門分野でこの種の好著がすくなくない。

經濟學の現状がこのようであるとすれば、「なかなか古典を読む時間などなくなる」という次第になりそうなおことは明かである。「古典に對してどういふ態度をとつたらいいか」という問題はかようにして生ずる。

四

經濟という文化領域では、宗教・藝術・政治などの領域にくらべて、問題の變化が急激である。今のうちに、技術が急速に發展する場合は、なおさらそうであろう。こういう事情から、ここでは古典が人々によびかける力が急速に弱まつてゆくように見える。しかし、こういう表面的事情に幻惑されて、古典を輕視することは、正しくない。他面、最初あげたような古典では、理論の道具立ては單純である。しかし、忘れてならぬことは、こういう古典の著者はこのシンブルな道具を身につけ、それでさまざまなその時々々の經濟問題と取組んだのであり、その理論的要具は、この現實への適用という吟味をへてゐることである。時として表現は晦澁であり、その道具立ての單純さと相まつて、それらは魅力なきものと感ぜられるかも知れないが、しかし、その中にはなかなか深い洞察がふくまれている。

この點、レオン・ワルラス『純粹經濟學要論』（第一版、一八七三年、手塚壽郎譯が岩波文庫にある）、J・R・ヒックス『價值と資本』（一九三九、安井琢磨・熊谷尙夫共譯を岩波現代叢書におさむ）などのいわば新しい古典と比較して見ることは興味ふかい。これらは明快であり、基礎理論に興味ある人にすすめたい。（數學は久武雅夫『經濟學研究者のための數學入門』——春秋社刊——のような書物を座右に置けば大體事足りる）。こういう理論は一見複雑であり、この複雑さがかえつて魅力をなすかもしれないし、また、その點に魅力を感じずる人に對して、こういう書物を早く讀まれるようすすめることを、決して躊躇しないが、しかし、そこでも、古典學派の單純かつ鋭い洞察がしばしば新しい姿であらわれている。しかも、もしそういう理論を現實に活かそうと思えば、古典學派がこころみたように、それ

を單純な道具におきなおすことが、當然、必要となるわけであらう。その場合、古典學派とどれだけの距離が生ずるか、わたくしは知らない。しかし、すくなくとも、精神においては、一貫したものが流れている。(例えば、ヒックスにおいて)。

五

「經濟學の古典に對してどういう態度をとつたらよいか」、この問題について、問題狀況ともいふべきものを、以上に概説した。最後に、個人的見解におちいることをおそれず、この問題についてのわたくしの處方箋をのべて見よう。

(一) 先ず古典を上げて(マスターして)から、いまの經濟、いまの經濟學に入ろう、という行き方は、おすすめしない。古典の理論は現實の問題との格闘を通して生れたものであり、現實の問題を考へて始めて味得しうるものが少くない。いきなり、古典をよんだのでは、「論語讀みの論語知らず」になる危険がある。實際、しばしばいわれるように、古典はいくたびとなく熟讀さるべきものである。短日月でこれを「上げる」ことは、最初から無理といわねばならぬ。一方、白書・新聞の經濟欄などで現實の知識を積みながら、他方、よくまとまつた親切な教科書によつて經濟の分析力を深めることを、先ず、おすすめしたい。なお、先にケインズの書物を舉げたが、ケインズをいきなり讀むことも、同様におすすめしない。適當なダイゼストから入るのがいい。

(二) しかし、古典を輕視してはならない。機會をえては、譯書なり、原書なりを求め、さらに、學史その他の適當な書物でなじみをつくりながら、だんだんとなれて行くべきである。いまの經濟の問題、いまの經濟學の問題と結

びつくことによつて古典の眞の廣さと深きとがわかるとともに、他方、いまの問題についての一層根源的な理解が、古典をとおして、あたえられるのではないか、とおもう。なお、できるだけ原書もおよみになるようおすすめる。經濟の世界では（どんなに良い譯書の場合にも）、日本語の譯語（とくに漢字）は英語のタームのもつ經濟的ニュアンスを殺してしまう危険が、實に大きいからである。

經濟をはじめて學ばれる方はそれぞれいろいろの問題をもつておられるであらう。しかし、その一切にこたえることはできない。説きもらしたことも多いが、一つの問題を中心に所見をのべることによつて、その他の問題に、間接的に、少しでも答えているならば、幸いである。